

歴史(学)のための弁明

——赤上裕幸『もしもあの時』の社会学——歴史に i f があつたなら——

花田史彦

一 はじめに

本稿では、赤上裕幸『もしもあの時』の社会学——歴史に i f があつたなら』(筑摩書房、二〇一八年。以下、本書)の書評を行なう。

本書は、メディア史を専門とする社会学者・赤上裕幸(以下、著者)による、歴史学への問題提起となっている。小説から社会学の理論まで、古今東西の多彩な文献を渉猟することで、最終的に「歴史とは何か」という、歴史研究者にとって出発点であると同時に終着点でもある命題へと導く野心作だと言えよう。

本書のタイトル「もしもあの時」「i f」といった言

葉に象徴されるように、「ありえたかもしれない可能性」を歴史のなかから具体的に析出していくことによって、歴史を単線的に捉えてしまうことから脱却する必要性を著者は提唱している。

このような著者の主張は、もちろん首肯できるものである。また、本書において展開される「架空戦記」をはじめとした多彩な素材をめぐる議論も、興味深いものであった。

ただし、本書において、いわば仮想敵とされている「歴史学」の扱いについて、評者は疑問を抱かずにはいられなかった。果たして「歴史学(者)」とは、本書で述べられているほど(味気ない)存在なのだろうか。

以下、本書の内容を紹介しながら、そのことについて考えてみたい。

二 本書の内容

本書は以下のような構成となっている。順を追って、各章の内容を簡単にまとめておこう。

- 序章 歴史に i f は禁物と言われるけれど
- 第一章 時間線を遡って
- 第二章 一九九〇年代日本の架空戦記ブーム
- 第三章 ファーガソンの「仮想歴史」
- 第四章 「歴史のなかの未来」学派
- 終章 もつともつと多くのものがあ트가き
- 資料編

序章「歴史に i f は禁物と言われるけれど」では、

本書を貫くキーワードである「反実仮想」についての説明が行われている。「反実仮想」とは、「事実と反する結果を仮想（Ⅱ想定）」（二一頁）する思考のことである。

我々が日常生活においてしばしば行なっている（たとえば「あのときああしていれば、こうなったであろう」といったような、この反実仮想という営みを、学術的な歴史研究に応用することを著者は提案する。その効用は、「偶然性」に目を向けることができるという点にある。それはすなわち、「実際に起きたこと」だけで歴史を語るのではなく、「起こりえたこと」にも着目した歴史叙述が可能になるということである。

ただし、本書における「反実仮想」とは、それだけにとどまらない。著者は、「反実仮想」の定義を「歴史の当事者たちが思い描いた未来像、すなわち『歴史のなかの未来』（三三頁）を含んだものにまで拡張している。

このような反実仮想という「方法」によって著者が

目指すところは、歴史を多面的に眺める視座の獲得である。以下、その作業が具体的に遂行されていく。

第一章「時間線を遡って」では、一八三〇年代から一九八〇年代までという長いタイムスパンで、主に海外における歴史改変小説や反実仮想を応用した歴史研究の事例が紹介されていく。たとえばナポレオンが世界制覇を果たす『ナポレオンと世界征服 (Napoleon et la conquête du monde, 1812 à 1832: histoire de la monarchie universelle)』(一八三六年)やナチス・ドイツによつてアメリカが征服された『歴史』を描き日本語訳もある『高い城の男』(一九六二年)、歴史学者が歴史上の人物になりきった論集『もしも私だったら… (If I Had Been…)』(一九七九年)、アメリカにおける鉄道抜きでの経済発展を統計的に「実証」しようと試みた『鉄道とアメリカの経済成長 (Railroads and American Economic Growth)』(一九六四年)などである。こうした反実仮想は、過去・現在・未来の改変可能性や偶然性を示唆しているという点において、あくまでも事実を与件と

してその解釈を目的とする「偽史」や「陰謀論」とは異なる。

ただしこれらの成果は、あくまでもフィクションのかたちであつたり、学術的なものであつても論理的な瑕疵が多く、現在の学術研究に応用することには問題があると著者は述べている。そのうえで、著者が重視しているのは、一九九〇年代以降の「反実仮想(研究)」の動向である。第二章以降では、主にそれが論じられていく。

第二章「一九九〇年代日本の架空戦記ブーム」では、日本の「架空戦記」を素材として、歴史のなかにパラレルワールドを見出していく欲望を析出していく。日本では、一九九〇年代にアジア太平洋戦争を主な題材とした架空戦記ブームが訪れた。その背景には、「戦後平和教育」に対する作者たちの違和感や、歴史修正主義の台頭といった現象があつたと著者は分析している(二)。

他方、反実仮想を学術研究に応用していく動きが日

本で盛り上がることはなかった。せいぜい戦史研究においてなされる程度であり、その意味で日本の反実仮想は「ガラパゴス」的な状況にあったと著者は述べている。

それでは、同時代の海外における反実仮想はどのような状況にあったのだろうか。

第三章「ファアガソンの『仮想歴史』」は、歴史学者のニール・ファアガソンとリチャード・J・エヴァンスとの論争を中心に、英米における反実仮想研究の状況を紹介している。

著者は、ファアガソンの編著『仮想歴史 (*Virtual History*)』（一九九七年）を取り上げ、その「方法」から学ぶことを提唱している（なおファアガソンは、かつての大英帝国による植民地支配を肯定的に評価している。その「思想」には与しないと著者は述べている）。

興味深いのは、一見すると突飛な発想に思われるファアガソンの「反実仮想」とは、じつはランケ以来の実証的な歴史学への貢献を企図したものであるという、

著者の指摘である。ここで「反実仮想」とは、決して現在の研究者による「希望的観測」のことではない。あくまでも、未来に何が起こるか知らない過去の人々の目線に立ち、彼ら彼女らが実際に考えていた範囲内での「歴史のなかの未来」を析出する営みである。したがって、ファアガソンの研究は「史料批判を軸とした正統歴史学の系譜に位置づけ得ることがわかる」（一六三頁）という。

ただし、ファアガソンが述べる「反実仮想」にも問題はある。先ほど名前を挙げたエヴァンスによつて批判がなされているが、その骨子は、対象が政治家や軍人に限定されてしまうということ、また「ありえたかもしれない可能性」を選択・証明するために、ほかの可能性を棄却してしまうというパラドクスに陥るということである。

こうした論争をふまえたうえで、著者は、「反実仮想」は、あくまでも歴史を動態的に捉えるという目的のための「手段」であることを強調している。

第四章「歴史のなかの未来」学派」は時系列を遡り、社会学者のマックス・ウェーバーや哲学者の市井三郎らの議論のなかに、フーガソンに先駆ける学術的な「反実仮想」の萌芽を見ることができ、という議論が展開されている。

また、やはり「反実仮想」の方法論を応用した政治学の事例も紹介されており、ただしそれは偶然性という要素を排除した危うさを見えていることが批判的に検討されている。

終章「もつともつと多くのものが」では、これまでの章をふまえ、「反実仮想」研究が抱えこんできたアポリアを乗り越えるための提案がなされている。著者はSF小説を「史料」とすることで担保される「反実仮想」研究の発展可能性について述べている。

これまでの反実仮想研究では、「もしもあの時〇〇であつたら、〇〇という結果が生じていただろう」という形でのみ考えられてきた。歴史の決定的瞬間を

切り取り、史実とは異なる結果の可能性を検証する作業は魅力的だ。だが、「もうひとつの歴史」をパラレルワールドとして「創造」する作業は、歴史改変SF（≡フィクション）との境界が曖昧になるというアポリア（難点）を抱えていた。こうした方法とは異なり、小説に描かれた「ありえたかもしれない未来」を抽出する作業は、個人や社会の選択や判断のみならず、その時代が持つ未来への想像力を浮き彫りにする方法として有効なのではないか。（二三五頁）

このように、過去の人々の「未来」への想像力に目を向けることは、すなわち現在を生きる我々もまた、過去の人々から見れば「未来人」であり、未来の人々から見れば「歴史上の人物」であることを意識させる。そのような視座が、過去のみならず現在や未来を正確に見定め、よりよいものにしていくのではないか。そのような「期待」とともに本書は締めくくられている。

三 総評

ここまで述べてきたように、本書は「反実仮想」を学術的な方法として鍛え上げていくための問題提起であり、また実践でもあった。

本書でなされている「架空戦記」やフアーガソンをはじめとした研究者の理論の紹介は、意義深いものである。また、それらの雑多な素材を読みやすい一書にまとめあげていく著者の鮮やかな手さばきにも、教わる人が多い。

加えて、キャッチーなタイトルからは意外なほど、内容は読み応えのある手堅い研究史・論争史となっている。著者の前著『ポスト活字の考古学―「活映」のメディア史一九一一―一九五八』に引き続き、まさに「面白い(オモロイ)」()作品である。

それらを前提にしたうえで、第一節で述べた評者の疑問をここでは具体的に掘り下げていきたいと思う。

著者は本書において、しばしば「歴史学(者)」について、その指し示すところを明らかにしないまま、批判的に言及を行なっている。たとえば次に引用するとおりである。

人文科学や社会科学の分野では、実験室で作業を行うことができないため、反実仮想が代役として機能する余地は十分にあつたはずだ。ところが、肝心の歴史学者は、「歴史の if」に否定的な態度を取ってきた。(二〇頁)

歴史学の分野で異端視されてきた「歴史の if」の問題 (二五五頁)

果たしてそうだろうか。たしかに、本書で扱われていた「架空戦記」といった個別具体的な素材に限定すれば、著者の述べていることは正しいだろう。また、その素材から著者が示唆している戦後史や一九九〇年

代論も、大きな展開可能性を感じさせるものである。

しかしながら、すでに色川大吉が一九七〇年代の時点で「未発の可能性」^③について考えることの重要性を指摘していたこと、また色川とともに（民衆）思想史の領域を牽引してきた安丸良夫が、竹内好に依りながら、過去における「人びとの意志や願望や構想力」を掘り起こし歴史を「可能性の幅」において捉える必要性を強調してきたこと^④などを鑑みれば、著者による「歴史学（者）」についての言及は、いささか仮想敵を矮小化している観が否めない。

政治史を専門とする有馬学も、次のように述べている。本書の歴史学に対する批判は、この有馬の記述によつて、ほとんどカバーされてしまうようにも思われるのである。

われわれは歴史を振り返るとき、神である。あらゆる事柄について結果を知りうるからだ。問題は、この神がときとして間違えるということだ。われわれ

がながめているのは、結果を知らない人々の行為の集積であることを忘れてしまうのだ。われわれは、一度は同時代人の眼に映じたイメージを可能な限りたどってみることからはじめるべきであろう。^⑤

このような書き出しから出発して、有馬は政治家の日記からチラシまで多彩な資料を駆使して大正期日本の社会史を描いてみせる。有馬の仕事は、通史叙述のひとつの到達点であろう。

沖縄史研究において「夢（未来）」の次元に着目した富山一郎の次の指摘も、本書の歴史に対する想像力を先取りするような問題提起を行なっている。

「歴史が…引用者」鎮庄あるいは法といった事後的な結果においてのみ記述されるならば、その記述は既に鎮庄の歴史あるいは統治の歴史でしかない。「負けてしまったのはこういう原因からだ」という誤った因果律にもとづく歴史記述は、それがいかに良心

的で、過去に殺された者たちへの同情に満ちていようと、拒否しなければならない。^⑥

富山の場合、沖縄を対象としていることもあり、その仕事は（本書で紹介されていたエヴァンスとは異なるかたちで）ファーガソンの議論の死角を衝くものであり得よう。

理論への志向が強い本書の内容に沿うのであれば、複雑系科学を明治維新史研究に導入し、「偶然性」を重視している三谷博^⑦の試みも、本書に先駆ける成果として挙げておく必要があるだろう。

さらに、「歴史実践」という言葉を提唱し、そもそも文字を持たないオーストラリアのアボリジニの手による歴史語りを決して「尊重」するのではなく、「歴史家の言葉として、つまりたとえば、大塚久雄やE・H・カーの歴史研究と同様に、歴史家による歴史分析として」^⑧（傍点原文ママ）扱った保刈実による異色の研

究もまた、「もうひとつの歴史」への見事なアプローチとして特筆に値するだろう。

このように、歴史学（者）が行なってきた方法への模索や叙述の実践とは、ある「客観的事実」や「法則」を与件としたものでもなければ、かといって歴史とは「物語」であると開き直ったものでもない。多くのアクターと可能性とを含み込んだ特定の時空間を、ふくらみのあるかたちで、かつ実証的に再構成していこうとする作業が積み重ねられてきたといつてよいのではないだろうか。

本稿では、歴史学の成果をいくつか振り返ってみることで、本書に対する若干の補足的な批判を試みた。ともあれ、本書の価値が減ずることはない。重要なのは、歴史学であれ社会学であれ、絶えざる分業と対話がなされていくことであろう。

歴史的に形成されたこの社会は、「今偶然にわれわれをとりまいて」に過ぎない。また同時に、そのことを意識しなければ、「今偶然にわれわれをとりまいて

いる」社会のほうに自分たちが「引きずってゆかれるだけになる」(九)のだから。

③ この章の議論は、倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー——一九〇年代保守言説のメディア文化』青弓社、二〇一八年とも共振するだろう。

④ 赤上裕幸『ポスト活字の考古学——「活映」のメディア史一九一一—一九五八』柏書房、二〇一三年、三七四頁。

⑤ 色川大吉『歴史の方法』大和書房、一九七七年、一〇八頁。

⑥ 安丸良夫『方法』としての思想史』校倉書房、一九九六年、四三頁。

⑦ 有馬孝『「国際化」の中の帝国日本——日本の近代四——一九〇五—一九二四』中央公論新社、一九九九年（引用は二三頁）。この有馬の議論は、赤上龍掲『ポスト活字の考古学』でも引用されている。なお、その際に有馬は「政治学者」として紹介されているが、「歴史学者」と書くほうが妥当であろう。

⑧ 冨山一郎『暴力の予感——伊波普猷における危機の問題』岩波書店、二〇〇二年、四〇—四一頁。

⑨ 三谷博『明治維新を考える』有志舎、二〇〇六年。

⑩ 保刈実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、二〇〇四年（引用は、保刈実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波現代文庫、二〇一八年、一二頁）。

⑪ 鶴見俊輔『方法としてのアナキズム』『展望』一九七〇年二月号（引用は、鶴見俊輔『方法としてのアナキズム』鶴見俊輔『鶴見俊輔集九——方法としてのアナキズム』筑摩書房、一九九一年、一六頁）。